

大償神楽

ユネスコ無形文化遺産登録
国指定重要無形民俗文化財
早池峰神楽

岩手県花巻市大迫町
大償神楽保存会
大償神楽後援会

大償神楽の演目 [約62演目]

令和7.10

◆式舞

[12演目]

浄め、招魂、鎮魂、^{よわい}予祝、^{たくせん}託宣などを内容とする。
(表六番) 鳥舞・翁・三番叟・八幡・山神・岩戸舞
(裏舞) 四人鳥舞・松迎・裏三番・裏八幡・小山神
・稲田姫

◆神舞

[11演目]

記・紀・風土記などを内容とする。
水神・天照五穀・天熊人五穀・天王・尊揃・悪神退
治・悪魔退治・天降・三韓・五大竜王・年寿

◆荒舞

[8演目]

密教・修験風の色彩があるが、神歌などの詩承が
ない。鎮魂、悪魔退散の舞。
注連切・普将・二人普将・三神・笹分・手剣・竜天
・おんだい舞

◆番楽舞

[5演目]

武士舞が多く、平家物語などに内容をもつものが多い。
鞍馬・屋島・曾我・木曾・おしき舞

◆女舞

[7演目]

女の怨恨をあつかった能舞で、山伏の法力の大きさ
をも取り入れている。番楽とも同意がある。^{おだまき}
機織・わらび折・橋掛・鐘巻・天女・汐汲・苧巻

◆獅子舞

(権現舞)

[2演目]

権現を獅子頭とし、戸毎に巡り、火伏、悪魔退散を
祈るもので、もどき風の舞もある。
しとげ獅子・くり獅子 (権現舞)

◆狂言

[17演目]

田植・金掘・舅見参・猿引・馬鹿むこ・品物・三八
・袖の沢・狐とり・嫁とり・伊勢参り・箱根番所等

●演目の概要

鳥舞

TORI-MAI

いざなぎ・いざなみ二神を象るともいう。鳥兜、直面女装の二人舞。東洋では古来、鳥は吉凶を報じ、悪霊を祓う霊力があると信ぜられている。鳥舞は神座の悪霊、不浄を祓い浄める最初の舞である。



翁舞

OKINA-MAI

人生の延命長寿を松の青さになぞらい、予祝をこめた神謡で幕出となる。三光尉風の面、羽帽子、袴、千草、前帯の装束。白扇を採って幽玄な四方鎮めのあと、鶴亀の如く延命息災であれかしと謡い、早拍子となって舞いおさめる。



三番叟

SANBASOU

切顎の黒式尉風の面、立烏帽子、脱垂、脚絆、千早の装い、白扇と鈴木を採って華やかな四方鎮めのあと、旦那の繁栄と豊饒を託宣する。

八幡舞

HACHIMAN-MAI

鳥兜、直面、男装の二人舞。勇壮な四方鎮めのあと八幡太神の本地を託宣し、最後に悪魔調伏の神器、弓矢を番え舞おさめる。



山神舞

YAMANOKAMI-MAI

山の神は、春は里に降って農業神となり、秋は山に還って山を守護すると信ぜられている。赤い阿形の忿怒面、鳥兜、脱垂、袴、白地の千早、太刀、幣の出立ち。荘重な四方鎮めを行い、九字を切って散供を捧げる。やがて早拍子となって六三を踏み、抜刀して悪魔を祓う。クズシは扮装をとき、一しきり太刀の舞があつて幣を採り託宣に入る。託宣は山の神の本地をのべ、旦那に降りかかるあらゆる災難も除いてとらすと結び、四方に幣打ちをして舞いおさめる。



岩戸舞

IWATO-MAI

記・紀の天岩屋戸に由来した曲である。日の神あまてらすが弟すさのをの乱行に絶えかね、天岩屋に閉じこもったため、国中が大いに乱れた。これを嘆いた神々は、思慮深いおもいかねを中心に話合った結果、岩屋の前で、うづめに賑やかな神楽をあげさせた。かくて日の神を再びお迎えし平和が蘇った。

舞は、おもいかねの荘重な振りからたちからをの出、岩戸開き日の神の出御はこの舞のクライマックスである。一巡して扮装をとき歓喜に満ちた華やかなクズシで舞おさめる。

天熊人五穀

AMAKUMABITO GOKOKU



日本書紀に由来する。つきよみは日の神あまてらすの命をうけ、うけもつの神を訪問した。うけもつの神は、つきよみの来

訪を喜び、口から種々の食物を吐き出して歓待したが、つきよみはその歓待を非礼と怒り、うけもつの神を殺してしまった。つきよみは帰ってその事を日の神に報告すると、日の神は大いに怒り、つきよみを夜の国に追放した。次に日の神は熊人をうけもつの神に遣わした。しかし、うけもつの神は既に死んでおり、その死体には五穀が稔っていた。熊人はその種を持ち帰り、日の神に献ずると、日の神は事の外喜び、この後は五穀をもって人民の食物とするというストーリーの舞である。

舞は赤の^{うんけい}囃形の^{ふんぬめん}忿怒面を着けた熊人の激しい四方鎮めがありやがて神祇の司、ふとたまの神の出御となる。舞はここで問答となりストーリーが組み立てられる。一巡して扮装をとき、華やかなクズシ舞となる。

天王

TENNOU

^{びんご}備後風土紀の^{そみん}蘇民将来に由来する。

午頭天王（すさのお）が南海に妻を求めに行く途中、^{こたん}巨旦将来、蘇民将来の兄弟に宿を求めた。しかし、強欲で悪行の多い兄の巨旦は、天王に対し雑言を極め追い返した。一方弟の蘇民は、^{つく}貧しいながら心^{かつ}を盡して歓待し、且一夜を与えた。天王は南海の帰り再び蘇民を尋ね、強欲非道な巨旦をこらしめ、慈悲深い蘇民に対し、疫病災難を除く秘法を授けた。

曲の中に、狂言よろしく巨旦を退治する場面があるが、これは巨旦の財宝を取上げる所作を面白可笑しく演じたものである。

水神舞

SUIJIN-MAI



びょうぶがおか

水の司屏風ヶ岡の大王は、神の氏子が水に不浄や汚れをしたことを怒り、神の氏子に祟りしようとした。一方多くの神々は、そうはさせまいと七日七夜み神楽を奏したところ、国中の水が絶えてしまった。このため大王をはじめ多くの眷族共は住家を失い、困惑極に達した。そこに、ふつぬしの神が現れ、神の氏子が過って水に不浄をしても祟りをしないと約束するなら水を授けようという。大王は約束は絶対守るので、是非水一合なりとも頂きたいと懇願する。ふつぬしの神は、それでは水を授けよう。これからは大水神となって水を守護し給えと命じ、クズシ舞となる。

天降

AMAKUDARI

記・紀の天孫降臨に由来する。さるたひこは鼻の高い赤のいわゆる天狗面を着け、激しい各様の四方鎮めを舞う。やがて天孫の神々の先達、うずめがでて問答となる。うずめは天孫が天降る道にお前は何故立ち塞がっているかを尋ねる。さるたひこは、天孫の天降りを神力で悟りお迎えに参じた。いざご案内をと答えた。かくて天孫はさるたひこの案内によって無事に天降りができるという内容である。

今でも祭例の御輿渡御に、天狗とおかめが先達するのはこれに由来する。



竜天

RYUDEN

竜王殿ともいう。竜王は水中にあり、仏法を護持し、また雨をよぶ霊力を持つと信ぜられている。しかし密教式は修験道風の激しいこの曲は、その由来を知る由もない。二人の荒舞で、阿、吽形の忿怒面、ザイを着け激しい四方鎮め、太刀を揺り降魔の振りがある。クヅシは面をとり、華やかな太刀の舞は、さながら竜が白波をかき立て、水中にたわむれる様にも似ている。

注連切

SHIMEKIRI



密教的な荒舞。一説には、あまてらすが天の岩屋から出御の際、^{しめ}注連を切って再びお入りにならないようにとの故事により、またこれに因んで、神と人間社会の境をとり除くためともいわれ、神楽最後の舞といわれている。

舞は、赤の^{うんけい ふんぬめん}兎形うんけい ふんぬめんの忿怒面、脱垂れ、^{たすき}四つ襷たすき、袴、脚絆、ざいの出立ち。二本の白扇で激しい四方鎮め、扇をサッと投げて一旦幕入り。やがて神歌につれて、金剛杖をかかえて飛び出る。^{しめなわ}注連縄しめなわに向って各様の棒使いをする。ここで一旦棒を捨て、手早く拔刀して上・中・下段といろいろ構えを見せ、最後に注連縄を切り、太刀諸共舞台上に残してサッと幕入り。

笹分

SASAWAKE

笹割りともいう。古来神事に湯立ての法がある。笹の葉を湯にひたして振り、そのしぶきを浴びて息災を得、或いは、そのしぶきを浴び神がかりして託宣たくせんをのべるのがその法である。この曲はその神事とかかわりがあるであろうか。四人舞で竜天と同様の扮装、各様の四方鎮め、或いは笹を採り、或いは太刀を採って勇壮に舞う。クヅシは竜天に似て太刀による華やかな振りとなる。

鞍馬

KURAMA



唐の天狗の主領ぜかいほう是界房ぜかいほうが、鞍馬山に修行中の源氏の御曹子、牛若丸を尋ね試合をいどむ。しかし是界房はものの見事に負けるというものである。是界房の美しい棒使いが見られる番楽風の舞である。

おしき舞

OSHIKI-MAI

膳舞、盆舞ともいう。神楽の所作の中には所々にアクロバット風の振りが見られる。この曲はその顕著なものの一つである。
番楽風の下舞が終ると櫓たすきをかけ、一枚のお敷を採って各様の振りがあり、更に二枚にして両手に持ち最後に転び返りする振りもある。

汐汲

SHIOKUMI

能の松風のロンギの部分を抜萃した様な謡がある。ざい、かんざし、女面、脱垂れの女装。太刀に赤い布を巻き、その両端に烏帽子を吊し桶に見たてた象徴がある。月の夜に、汐汲む桶に影は二つと詩情豊かに舞いおさめる。

機織

HATAORI



昔、若狭の国に仲睦ましい夫婦があった。夫は修業のため京に上ったまま、三年経っても戻らない。そこで土地の者は、夫は京で女をもっともう帰らないと、手を替え品を替えて言い寄った。これを真にうけた機織りの女は、ついに池に身を投じた。女が死んで七日後夫は京から戻ったが、女は亡霊となって池に現れ或いは悲しく、また激しく機を織った。夫はその自責を深く感じて、妻のために菩提を弔うという語りである。

権現舞

GONGEN-MAI

神は本来姿はないが、仏教伝来とともに神も権現として姿を現した。神楽の権現も、獅子頭に神を移して権現とよぶ。つまり神が獅子頭の姿をか

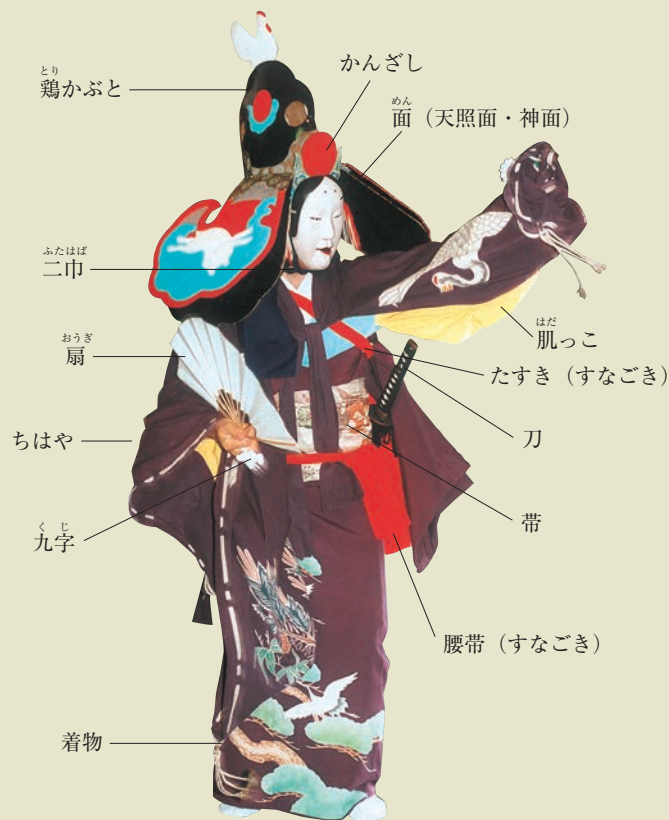


りて現われ、その威力を神仏の靈験によって悪魔調伏や、無病息災、五穀豊穰よわいの予祝を祈祷する。この舞は神楽最後の曲で、五穀や神酒を供え豊穰を祈る他、幼児や歳男が頭を噛んでもらい、息災にあづかる信仰もある。最後は水を捧げ、権現自ら柄杓をくわえ、火を扱う室内に水を振りかけ火伏の祈祷を行う。

(山本清志 記)

装束・持ち物の解説

あまてらすごく
「天照五穀」より
(俗称：女五穀)



装束・持ち物の解説

あまくまびとごく
「天熊人五穀」より
(俗称：男五穀)



早池峰に舞う

北上山地の主峰、早池峰山(標高 1917m)の山麓に、中世から近世にかけて、多くの山伏が住んでいた。“山伏かぐら”はこの山伏達によって語り演じられたことからその名がある。起源、由来については、かならずしもさだかでないが、早池峰の開山にゆかりが深い山陰家から、大償に伝えられた。長享

Many mountain priests lived in the foot of the Mt. Hayachine (altitude 1917 meters) of Kitakami mountainous from the Middle Ages to the early Modern Ages. “Yamabushi Kagura” was named so, because the Kagura was told and performed by mountain priests (=Yamabushi in Japanese). The origin of Yamabushi Kagura is not necessarily clear. However, the Yamakages having deep connection of Mt. Hayachine handed

(1487~1488) の文献によると、創草期の神楽は、シャーマン的な呪法の所作をもつ、阿知女の神楽で、山陰家の神楽であるという。やがて山伏達によって幾世紀もの時代と変遷の中で、神祇、密教、五行説などの神楽が段階的に導入され、集大成して現在に至ったものであろう。

down Yamabushi Kagura into Otsugunai. The documents in 1487 are written that the early Kagura is Achime's (Amaterasu Ookami) Kagura, which motion is like a shaman and that it is the Yamakage's Kagura. Through long times and many changes, Kagura as Jingi, Mikkyo and Gogyosetsu were introduced into Yamabushi Kagura gradually, and were arranged, and perhaps Yamabushi Kagura leads to the present Kagura.